

カツオ 中西部太平洋

Skipjack, *Katsuwonus pelamis*



管理・関係機関

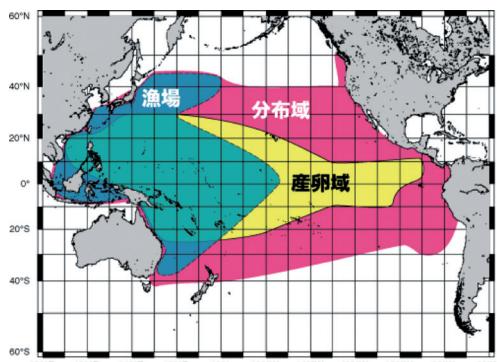
中西部太平洋まぐろ類委員会（WCPFC）
太平洋共同体事務局（SPC）

最近の動き

最新の資源評価は SPC の専門家グループにより 2014 年に行われ、結果は同年 8 月の WCPFC 科学委員会に報告され、赤道域における高い漁獲による分布水域の減少、高緯度水域への回遊の減少への懸念が示された。科学委員会は、これを踏まえて管理規制措置や資源研究、評価に関して勧告を行った。2015 年 12 月の WCPFC 年次会合において、長期管理目標について議論され、暫定的な目標が合意された。この管理目標値は 2019 年に改訂される予定。

生物学的特性

- 体長・体重：尾叉長 100 cm・25 kg
- 寿命：6 歳以上
- 成熟開始年齢：1.5 歳
- 産卵場：表面水温 24℃以上の海域
- 索餌場：表面水温 15℃以上の海域
- 食性：動物プランクトン、魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者：まぐろ・かじき類、さめ類、海鳥類など



太平洋におけるカツオの分布域、産卵域及び漁場

利用・用途

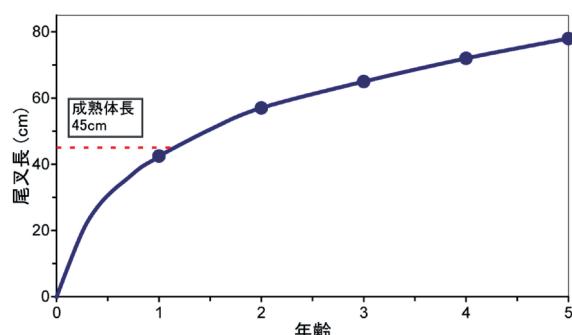
缶詰や節原料、刺身・たたきによる生食

漁業の特徴

1950 年代から 1970 年代までは主に竿釣りが中心で漁獲量が伸びていた。1980 年代にはいると漁場の拡大に伴う活餌保持の問題と燃油高騰等の経済的要因から遠洋竿釣り漁船数が減少して竿釣り漁獲量の伸びが停滞した。竿釣りの漁獲量は、1980 年代後半以降は緩やかに減少している。1980 年代には各国のまき網船による熱帯水域漁場の開発が始まって漁獲量の急増期に入り、以降現在までまき網の漁獲量は増加している。竿釣りは、2005 年頃まで日本が約 6 割を占めていたが、次第に減少し、2006 年以降はインドネシアが最も漁獲量が多くなり、近年の日本が占める割合は 4 ~ 5 割ほどになっている。まき網については米国、韓国、台湾及び日本の遠洋漁業国が近年の漁獲量の 5 ~ 6 割を占め、他はインドネシア、フィリピンが多い。

漁獲の動向

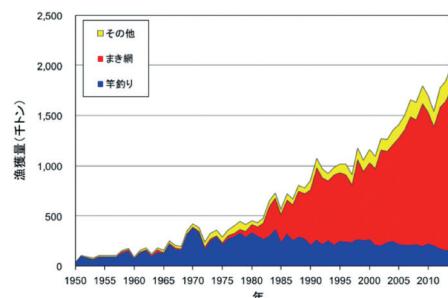
漁獲量は、主に竿釣りにより、1960 年前後には 10 万～17 万トン、1970 年には 20 万トンを超えた。1970 年代後半には竿釣りが 30 万トンを超える水準となり、全体では 40 万トン台となった。1980 年代以降はまき網による漁獲量が急増し、1990 年代には 100 万トン前後に増大、さらに 2009 年には 180 万トン近くに達したが、2011 年にかけて減少した後、再び増加に転じ、2014 年は 199 万トンと過去最高を記録した。2014 年の漁法別漁獲量（暫定値）は、まき網が 161 万トンで 82%、竿釣りが 15 万トンで約 9%、その他の漁業が 23 万トンで約 9% である。2014 年については、特に韓国、米国で多く漁獲し、それぞれ 21.9 万トン、24.8 万トンであった。国別漁獲量は、2009 年を除き 2010 年までは日本が最大であったが、2011 年には 24 万トンに減少し、インドネシアが 27 万トンで最大となった。2014 年のインドネシアの漁獲量は、2013 年に続き 30 万トンを超えた。韓国、フィリピン、台湾、米国は近年それぞれ 18 万～25 万トンほど漁獲している。



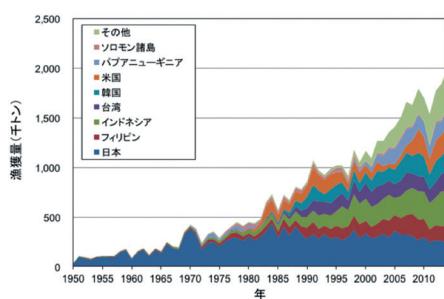
資源状態	管理方策のまとめ
<p>2014 年の SPC の専門家グループによる Multifan-CL を用いた 1972 年から 2012 年についての資源評価において、現在（2008～2011 年）の漁獲量は MSY レベルを下回っており過剰漁獲にはない ($F_{\text{cur}}/F_{\text{MSY}}=0.62$) とされた。産卵親魚量は、1990 年代は約 450 万トン付近を推移していたが、2000 年以降減少しており、現在の 2012 年は約 320 万トンと MSY レベルを上回っていることから乱獲状態はない ($SB_{\text{cur}}/SB_{\text{MSY}}=1.94$) とされ、高位と判断された。他方、同年の WCPFC 科学委員会においては、漁獲死亡が増加傾向で、かつ資源量は減少傾向が続いていることが認識された。また、赤道域における高い漁獲が資源の分布水域を減少させ、その結果、高緯度水域への回遊が減少している懸念が示された。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 熱帯水域のまき網漁業に対し、① FAD 操業の段階的な規制強化（2014～2016 年）、②公海における FAD 操業の原則禁止（2017 年より）、③島嶼国以外のメンバーが保有する隻数の凍結（FAD 操業規制はメバチ幼魚死亡率削減を目的とするが、本種にも影響を与える）。 漁業がないと仮定した資源量の 50% を暫定的な目標とすること、②この管理目標値は遅くとも 2019 年に見直され、それ以後も適宜見直されること、③見直しに際しては、日本沿岸域への来遊状況等に関する科学委員会の勧告が考慮されること、を長期管理目標とする。

管理方策
<p>WCPFC は、メバチ・キハダ・カツオの保存管理措置として、熱帯水域のまき網漁業に対し、①集魚装置（FAD）を用いた操業の段階的な規制強化（2014～2016 年）、②公海における FAD 操業の原則禁止（2017 年より）、③島嶼国以外のメンバーが保有する隻数の凍結（FAD 操業規制はメバチ幼魚死亡率削減を目的とするが、本種にも影響を与える）。2015 年 12 月の WCPFC 第 12 回年次会合においては、保存管理措置の見直しが議論されたが合意に至らず、現行措置が継続されることとなった。同会合においては、カツオの長期管理目標として、①漁業がないと仮定した資源量の 50% を暫定的な目標とすること、②この管理目標値は遅くとも 2019 年に見直され、それ以後も適宜見直されること、③見直しに際しては、日本沿岸域への来遊状況等に関する科学委員会の勧告が考慮されること、が合意された。</p>

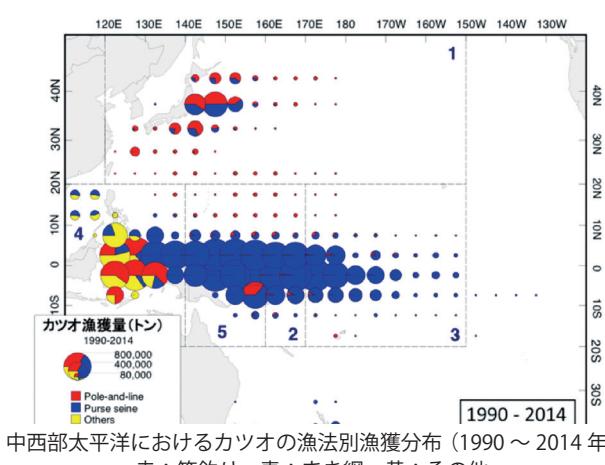
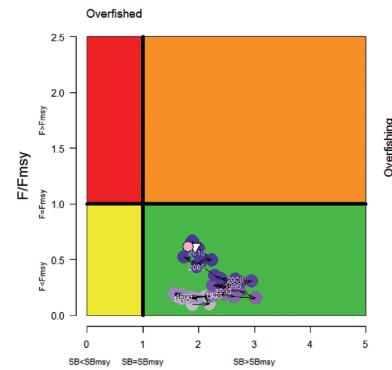
資源評価のまとめ
<ul style="list-style-type: none"> 2014 年に SPC が Multifan-CL により、1972 年から 2012 年について実施。 産卵親魚量は、1990 年以降減少傾向。現在（2012 年）は約 320 万トンで漁業が無いと仮定した場合の量の約 48%。 漁獲係数は、現在は MSY レベルを下回っており過剰漁獲にはないが、1990 年以降増加傾向が続いている。 赤道域における高い漁獲が資源の分布水域を減少させ、その結果、高緯度水域への回遊が減少している懸念がある。



中西部太平洋におけるカツオの主要漁法別漁獲量の経年変化



中西部太平洋におけるカツオの国別漁獲量年変化

中西部太平洋におけるカツオの漁法別漁獲分布（1990～2014 年）
赤：竿釣り、青：まき網、黄：その他MSY レベルを基準とした漁獲係数の相対値 (F/F_{MSY}) と
産卵親魚量の相対値 (SB/SB_{MSY}) の経年変化
縦軸及び横軸の 1.0 は MSY レベルを示す。

カツオ（中西部太平洋）の資源の現況（要約表）	
資源水準	高位
資源動向	減少
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	154.3 万～199.3 万トン 平均：176.3 万トン (2010～2014 年)
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	23.3 万～29.9 万トン 平均：26.6 万トン (2010～2014 年)
最新の資源評価年	2014 年
次回の資源評価年	2016 年